

## 第6室

(5) 9:30 ~ 10:00 (6) 10:10 ~ 10:40  
(7) 10:50 ~ 11:20 (8) 11:30 ~ 12:00

## 第6室 (5)

## 高校1年生を対象とした即興で意見を伝える活動に対する生徒の認識と言語使用について

宮崎 貴弘 (神戸市立葺合高等学校)

本研究では、英語を使い即興で意見を伝える活動において、流暢に話すことができる生徒とそうでない生徒の活動に対する認識と言語使用の違いを明らかにする。

高等学校において2022年度から年次進行で実施される新学習指導要領では、『やり取り』や『即興性』を意識した言語活動が十分ではないこと(文部科学省, 2018)が、英語授業の課題として例示されている。筆者の授業では、英語で教科書内容を説明するリテリングの活動において、既習の語句や表現を使い、途切れずに再生できるようになってきている。しかし、教科書内容に関連した意見を尋ねる質問に即興で答える際には、生徒の発話の流暢さが格段に劣る状況を目の当たりにした。一方で、流暢さを保ちながら発話する生徒もいた。そこで、即興で意見を伝える活動において、流暢に話すことができる生徒とそうでない生徒には、活動に対する考え方や感じ方、言語使用にはどのような違いがあるのかを明らかにしたいと考えるに至った。

高校1年生(普通科)のコミュニケーション英語Iの授業において実施したインタビューテスト(2学期に2回実施)での生徒の発話と、生徒が回答したアンケートの記述(2学期末に実施)を分析した。その結果、即興であっても流暢に話せる生徒と、流暢に話せない生徒の発話には、発話中の言い淀みや言い直しをしている場所に違いがあることがわかった。また、言語使用における動詞の種類や沈黙が生まれる場所にも特徴があった。これらは、アンケート記述の分析結果とも一致する部分が多かった。即興で発話できる生徒は、話し相手に伝えることを重視し、簡単な単語や表現を使用しようとしていることが特徴として挙げられる。一方で、即興での発話が得意ではない生徒は、内容への不安を抱え、言語使用の正確さに意識が向いていること、さらには、頭に浮かんだ日本語を英語に変換して発話していることが特徴に挙げられることが分かった。

## 第6室 (6)

## SNS X

## 教養課程におけるパラメンタリーディベート(即興型英語ディベート)の実践

松家 鮎美 (岐阜薬科大学)

本研究では、英語コミュニケーション能力を養成するための試みとして、1-2年生68名を対象にパラメンタリーディベートを実践した。対象学生の内8割が、言語に関わらずディベートを行った経験がないと答えており、本研究では、本来のディベートを簡略化し「立論」「反駁」のみを扱った。クラス内でディベートを行う上での注意点については、ループリック評価表を用い、

①聞き手にアイコンタクトを取っているか、②メンバー全員がディベートに参加しているか、③論理的な議論や④説得力のある対応（反駁）が出来ているかを問うた。また、英語に関する項目では、⑤文法ミスがなく、相手に分かりやすい表現を用いることが重要である旨事前に確認した。

ディベートは全部で3回実施し、その後ルーブリック評価表を基に、学生は自己評価及びピア評価を行った。その他、アンケートを用いて学生の意識調査を行った。

ルーブリック評価については、学生の自己及びピア評価は、教員による評価より高いことが分かった。特に③論理的な議論や④説得力のある対応（反駁）については、教員評価と分かれるポイントとなり、今後のルーブリック活用法に課題の残る結果となった。

学生アンケートについては、多くの学生がディベートを効果的な英語学習法として前向きに捉えていることを示唆した。「英語ディベートは、日本語に比ベストレートに意見が述べられるため、相手の言っていることが分かりやすい」とか、「英語で話すのは難しいが、ディベートを行うことは、自分の英語力の弱点を見つける助けにもなる」との声があった。また、学生の内8割以上が、ディベートで相手に反論することに抵抗がなく、半数以上はディベートで勝ち負けが決まることは学習の励みになると答えていた。グループワークについても肯定的な見方が多く、今後も教養課程において学生のコミュニケーション能力の養成にディベートを用いることの有効性が示された。

## 第6室 (7)

### 中学生のやり取りの質の改善のための実践研究

—生徒のつまづきへの指導を通して—

吉崎 理香（富山大学教育学部附属中学校）

本研究の目的は、CEFR-J、A1-A2レベルの中学3年生がペアで行う英語での意見交換（問題解決型ディスカッション）の際に、相手の意見に関連づけて自分の意見を調整し、次の発話に繋げることができるために教員は何をどう指導すればよいのかを解明することである。そのためのリサーチクエスチョンは、①やり取りで相手の意見に関連づけて自分の意見を言えないペアにはどのような課題があるのか、②その課題を解決するために、どのような指導を、どのタイミングで行えばよいのか、である。これらを明らかにすることによって、意見交換における指導の具体を示すことができると考える。学習指導要領の「やり取り」の目標到達に向けて現場の実態をふまえた指導ができるはずである。

本実践では、中学3年生に対して1週4時間、約5ヶ月間の意見のやり取りの指導を行った。トピックはALTの日常の困り事についての相談で、生徒がペアでやり取りを通して合意できた解決法を助言として行うというものである。毎授業の帯活動としてやり取りの実践を積み重ね、その中で明示的に意見交換の方法を指導した。また、ペアでの振り返りの時間を重視し、振り返りシートによって振り返りの視点を絞ることで、生徒がつまづきの具体の場面に気付き、指導した意見交換の方法を意識して改善点について話し合うことができるようにした。そして、振り返りで得た学びをすぐに実践できるよう、同じトピックで3回やり取りを繰り返した。

研究結果から生徒のやり取りの質がどのように変化したかを示すとともに、実践を通して

得た会話分析の結果から、必要な指導として、以下の4点、1) social-interaction strategies と modified-interaction strategies の継続的な指導、2) negotiation for meaning の具体的な指導、3) やり取りに便利な定型表現の導入、4) 振り返りの時間の充実、を提示したい。

第6室(8)

SNS X

## 英語学習者のスピーチ時に持つ困難と発話の構成

和田 順一(松本大学)

本研究では、paraphrasing の明示的指導による学習者のスピーチへの影響を見る研究の中で、学習者のスピーチ実施中の沈黙がどのような要因のために起こっているかを調査したものである。英語で授業を行うことを基本とする現行の中学校・高等学校学習指導要領においては、日常的に学習者の英語発話を聞く、また学習者が発話に困難を示している状況を見るが多くなっている。そのため指導者にとってこれらの発話時の困難を知ることは、どのように指導をしていくかにつながり非常に重要である。

学習者のスピーチまたは発話において、学習者自身の言いたいことが言えないために、コミュニケーションの回避につながってしまうことがある。このようなコミュニケーションの回避第二言語習得に有効とされる多くの機会を失ってしまう。その一つには第二言語習得に必要な理解可能な input を受ける機会を失ってしまうことが挙げられる。コミュニケーションを取ろうとする情意の向上については、paraphrasing の指導が役に立っていることは和田(2020; 2021)で分かってきた。

しかし、学習者が自分自身の意見を英語で言いたい気持ちがある中で、実際に沈黙が起こることがある。学習者が自分の意見を言いたい状況であるので、この沈黙は学習者が英語をどのように発話しようかと考えている時間である。スピーチ中の沈黙において、学習者が何を考えているのか、どのように次の発話をしようとしているのかを調査することにより、学習者が英語発話時に持つ困難や、学習者がどのように英語の発話を構成していくのかに焦点を当てていきたい。

学習者が発話時に持つ困難としては、単に表現したい単語が思いつかないものから、使用したい単語や構造は思い浮かんではいないが、それが上手く使用できないという例が挙げられる。これらについて発表でより詳細にみていきたい。